慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	R・M・ブレイス ボルドーにおける食糧問題とフランス革命
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.7 (1954. 7) ,p.781(79)- 783(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19540701-0079
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

それと相關する可能性を除外するものではない。

さらに興味ある可能性は可處分所得が一つもしくわそれ以上の他の內生變數、例えば價格とがおそらくは所與の商品の消費量とかの函數でもあることである。もしそうならば我々はたゞちにその方程式を需要函數（もし消費量が全然あるいは近似的にも既定變數でないならば供給函數も）とともに同時的に導出する問題に直面する。このようなことは以下の論議を通じて心に留めておかねばならない。

はじめに、もし當該商品が比較的重要でないならば――すなわちそれに對する總支出額が國民所得に比して極めて小であるならば――その商品の價値に比較的大きな變化が生じても總體的消費者所得の水準には僅かの效果しか及ぼさないであろう。例えば生、豚肉および牛乳は小賣價値から言つて最も重要な農產食料品であるが、それらの各々に對する支出額はともに可處分個人所得の二ないし三パーセントであるから、これら商品の一つの供給の變動が、主として消費者需要函數の諸係數を通じて、可處分所得の總變動の二ないし三パーセント以上を說明するか否かは疑わしい。事實可處分所得の變動の大半は通常投資および政府支出の變化に歸せられるから二、三パーセントの效果を認めることさえ高きにすぎることは殆ど確實である。

この命題を支持する要因は種々擧げうるであろう。例えば農業生產、とくに畜產物の生產が比較的安定していること、および主要な農產物間の（需要）競爭程度が限られていることである。豚肉および牛肉に對する消費者需要の彈力性が一から餘り離れないという事實は、そうでなければこれらの商品から出るかもしれぬ所得效果を制限する傾向がある。したがつて豚、牛肉および牛乳の價格變動からもたらされる可處分所得への「反效果」が發表されている可處分所得系列の測定誤差よりも、たとえ後者が觀察される分散の一パーセント以上ではないと評價されたとしても、大きいということは疑わしい。もしこの結論が主要な農產物について正しければより主要ならざる生產物についてはなおのことである。

c　二つもしくわそれ以上の同時的需要函數が存在するか？

商品生產量および消費者所得が既定變數であつてもなお商品價格の決定に二つもしくわそれ以上の同時的需需函數が含まれていることがあるかもしれない。例えが商品の大部のパーセンテージが輸出されるものとすれば我々は(1)式を擴充して輸出もしくは海外需要の何らかの測定値を含むようにせねばならない。すなわち

(1.3)　$X_1=f(X_2,X_3,X_4)$

こゝで X_4 は外國における需給要因の純結果である。もし我々が價格を總生產量、國內所得および純海外需要の函數としてあらわすような單一最小自乘方程式を當て嵌めるならば、國內市場の相對的重要性が大きく變化しないかぎり、滿足な價格推定方程式を得るであろう。しかしもし我々が國內および海外需要曲線を別個にしてパラメターを推定し度いと思うならば、それらを同時推定方式によつてて導出することを企てねばならない。簡單な模型は次の諸式で與えられる。

(1.3.1)　$X_1=f_d(X_{2d},X_3)$

(1.3.2)　$X_1=f_e(X_{2e},X_4)$

(1.3.3)　$X_2=X_{2d}+X_{2e}$

こゝで X_2 は總需要量、X_{2d} は國內需要量、X_{2e} は輸出量である。この模型は識別可能であるから誘導形法によつて當嵌めることができる。

右の手續きは商品の大部が輸出されるとき論理的に指示されるものであるが、輸出量が僅かのパースンテージにすぎないときは我々は(1)または(1.3)の單一最小自乘方程式を當嵌め、含まれるべき偏りを考慮することで滿足することができよう。

結　論

經濟構造の概念は如何なる特定の統計的測定技術よりも廣いものであるから、私は需要分析の企ては觀察資料を生み出す經濟諸關係の構造の記述から出發すべきであると信じる。商品、市場および統計系列に關する特別な知識はこのような記述に缺くべからざるものである。完結構造における各關係式の統計的推定はこの知識によつて導かれねばならず、また識別および眞の同時性に關する諸問題はそれらにきつちり適合せねばならない。

この點で私は同時推定方式の提唱者達と基本的に一致していると信じているが、農業生產物に對する需要分析での私自身の經驗は非常に多くのばあいについて――おそらく同時推定方式論者の文獻から人々が期待する以上に、單一方程式推定に導いたのである。或る程度まで、一般の同時的なばあいについての先入主が實際にそれが適用しうるときにも簡單な方法を容認するのを澁らせるに至つたようであり、このことは一部の研究者をして「しやくし定規」な計量分析すなわち如何なる資料を分析するばあいにも同一の高度に精巧な計算方式をとることに導く結果となつたのである。このようなやり方は諸關係式の最も複雜な集合に最小自乘法や圖示法を用いるという素朴なしやくし定規に比して餘り聰明だとは言えない。私の推量するところでは妨害要因の性質、すなわちそれの組織的部分に對する相對的大さ、および妨害要因と觀察變數との間の有意的な相關をもたらすような諸要因、についての種々異つた先入主もまた應用需要分析家と主として方法論に興味をもつた人々との間に誤解を生ぜしめた原因となつている。後者の人々は說明のために構成された例にのみ（勿論教育的效果はあるが）注意を奪われて眞の經濟資料に含まれている諸問題に餘り注意しなかつたようである。

理論の進步は測定の進步にとつて重要であるが、私には後者とそ計量經濟學の眞の目標であると考えられる。測定の進步は特定の資料とそれが生み出された經過に詳しい人々と、模型を展開し妥當な技術を發展せしめるための數學的素養をもつた人人との協力によつて早めることができるのであるから我々はその實現に努力すべきである。

（註）Trgve Haavelmo, "The Statistical Implications of System of Simultaneous Equations", Econometrica, Jan. 1943.

（辻村江太郎）

書評及び紹介

R・M・ブレイス『ボルドーにおける食糧問題とフランス革命』

(Richard Munthe Brace, "The Problem of Bread and the French Revolution at Bordeux" American Historical Review Vol. LI, No. 4 July, 1946 pp. 649—669)

革命前のボルドー港はフランス第二の港都であつた。西印度貿易の獨占と葡萄酒の輸出とによつて商人階級は巨大な財產を獲得し、その極度の繁榮に旅行者のヤングも驚歎した程であつた。

しかし商人階級の富裕と比較した場合、ボルドーの勞働階級の生活は意外に悲慘なものであつた。小麥生產の犧牲において葡萄增產が强行され、必要な小麥を諸外國からの輸入に求めな

ければならなかつたという事情は、勞働階級の生活不安を徒らに深めるばかりであつたのである。海上輸送を妨碍する如何なる條件もボルドー市の勞働階級にとつて生活の重大な脅威となつていた。第十八世紀を通じて頻發した對外戰爭は、かかる妨碍原因のうちでも特に重要なものであつたのである。

第十八世紀に入つてボルドーの勞働階級を襲つた最初の生活不安は、實にイスパニア繼承戰爭の勃發が直接の原因であつた。輸入の杜絶から食糧は極度に不足し、生活の困窮はユトレヒト講和の成立まで續いたのである。

しかしイスパニア繼承戰爭の終結によつてボルドー港は活況を取戻した。そしてオーストリア繼承戰爭の勃發當初においてもボルドー港は依然としてその繁榮を持續することができた。しかしイギリスの參戰によつてフランス沿岸の封鎖が斷行されて以來、ボルドー港は衰退を餘儀なくされた。もつともアーヘンの講和條約によつてフランスの西印度領有が確認された時、ボルドー港は再度西印度貿易の一大中心として輝かしい繁榮に向うことができたのであつた。

しかし七年戰爭の勃發を契機としてボルドー港は極端に衰退して行つた。特にガーデループ、マルチニークの陷落はボルドー港の貿易活動を決定的に破壞した。商人階級は多く倒產し、勞働階級の失業は一般化した。しかも食糧の不足はボルドー全土に及び、生活の不安を一層深刻なものとしたのであつた。

しかし七年戰爭の終結によりボルドー港は非常な繁榮期を迎えることができた。ボルドー港の貿易額は一七五〇年の二二、一九五、一六一リーヴルから、一七七〇年には一七〇、八二八、三三三リーヴルに達した。又年々ボルドー港に出入する大小の船は三百隻を越した。ただしこの未曾有の繁榮期においても、一七六六年と、一七七三年とには、天候の不順と配給組織の貧弱とのため深刻な食糧不足が起つている。

一七八六年に成立した對英協約はボルドー港の發展を一層確實なものとした。ボルドー港からロンドンに輸出される葡萄酒の量は增加し、一七八六年の四八〇トンから、一七八七年には一擧に、二、一二七トンにも達した。これによりボルドー市の葡萄酒商が獲得する利益は絶大なものであつたのである。

しかし他方においてこの協約はイギリス工業製品のフランス市場進出を容易にしたものでもあつた。ボルドー市の工業はイギリス工業の敵ではなく、結局において敗退を餘儀なくされた。このため勞働階級の失業は一般化し、その生活は困難なものとなつた。しかも一七八八年の不作は勞働階級の生活不安を一層深刻なものとした。この時期に顯著な進出を示した商人階級に對し、勞働階級の生活はボルドー市において意外に悲慘なものであつたのである。

勞働階級の生活不安に對しボルドー市當局はその救濟策に腐心した。そしてこの對策として市當局は食糧の無料配給を實施し、又公安の秩序を亂す流言の流布を取締る中央機關を設置した。

他方市民も亦食糧問題に重大な關心を寄せ、その解決のために義勇隊を組織する程に積極的であつた。當時ボルドー市にはかかる種類の義勇軍が十三隊も結成された。この義勇隊は隱匿食糧の摘發に、食糧の對外流出の防止に、パン商人の持つ秤の檢査に從事し、食糧問題の公正な解決のために努力したのであつた。市當局も義勇隊のこの積極的な態度に好感を持ち、食糧價格の監視を實行しようという際に義勇隊の援助を求めた。かくして委員が各義勇隊から選出され、直ちに取締活動を開始した。「パン商人は巨大な利益を收めつつある」。しかし委員のかかる報告も、市當局に對し眞に公正な救濟策を樹立させる程の

迫力を持つものではなかつた。實に食糧問題の解決は結局において一七九〇年の豐作にまで持越されなければならなかつたのである。

一七九〇年に一旦解決した食糧問題は、革命政府がオーストリア、プロシアに對し宣戰した一七九二年に、再び重大な社會問題となつた。輸入食糧の杜絶から事態はボルドー市において意外に急迫して來た。市當局は食糧不足の緩和のため隣接諸州から必要な食糧の調達を企圖し、委員を任命して派遣したが、成功は覺束なかつた。現に僅かに一、八〇〇プッシェルを獲得できたのみで、勿論これがボルドー市の必要を滿たし得るものでなかつたことはいうまでもない。かくしてボルドー市當局はパリの革命政府に對し援助を求めたが、容易に中央の救濟を得ることができなかつた。

しかも革命政府がイギリス、イスパニアに對し宣戰した一七九三年以來、食糧の不足は一段と深刻の度を增した。厖大な軍隊の維持のため食糧の徵發が强化されたことは、ボルドー市における食糧の不足を重大な段階に追込んだ。飢えた市民は市役所に殺到し、食糧を求めて暴徒化する程までに事態は急迫していたのであつた。

かかる事態に直面してボルドー市當局は勿論パリの革命政府に援助を求めた。しかし今度も何等か救濟を得ることとする出來なかつた。これは市當局を極度に狼狽させた。「パンを下さい。市内には十二萬もの人がいるのです。助けて下さい。見捨てないで下さい」。市當局が熱心に援助を懇願したにもかかわらず、食糧の不足はボルドー市において特に深刻な社會問題となつていたのであつた。

とにかくこのように第十八世紀のボルドーは頻々と食糧不足に見舞われていた。戰爭による海上輸送の杜絶が、必要な食糧を多く海外に求めていたボルドーにおける食糧不足の重大な原因であつたことはいうまでもない。しかしこの食糧不足を緩和することに對して君主政府も革命政府も全く積極性を缺いていた。現實において、困難なこの事態は、平和の到來による海上貿易の再開で解決されるという經過を辿つていたのであつた。

（渡邊　國廣）

書評及び紹介

シェパード・B・クラフ

『フランスの經濟發展における阻止的要因』

(Shepard B. Clough, 'Retardative Factors in French Economic Development in the Nineteenth and Twentieth Centuries" Tasks of Economic History 1946. pp. 91—102)

フランスの經濟發展をヨーロッパの他の諸國のそれと比較しても、一八七〇年までは決して遜色がなかつた。しかし一八七〇年以後となると、もはやフランスの經濟發展はヨーロッパの他の諸國のそれと對比ができない。實に一八七〇年を契機としてフランスの經濟上の優位はヨーロッパの他の諸國によつて奪われ、フランスは後進國の地位に轉落を餘儀なくされてしまつたのであつた。

このことは人口・外國貿易・工業生產に起つた重大な變化から容易に察知できるに違いない。人口についてみれば、第十九世紀初頭のフランスの人口が二八、〇〇〇、〇〇〇人。これはドイツの人口と同數、又イギリスの人口の三倍。しかし一八七〇年にはフランスの人口三六、〇〇〇、〇〇〇人に對し、ドイツのそれは四一、〇〇〇、〇〇〇人、イギリスのそれは二六、